

## 労働と価値に関するイ・ルービンの見解について

米川紀生

### I

マルクス経済学の軸心がツガンの言う「絶対的労働価値」<sup>(1)</sup>にあるとするのは疑問だとしても、労働が「全経済の基礎」であり「社会的依存関係の尺度」<sup>(2)</sup>であるのは確かである。それで経済理論の展開を労働から始めるのが最も一般的であろう。だが資本制社会に於ては、それが価値という形態をとる。そこでは労働と価値との相互関係が問題になる。ここでは、この労働と価値との区別と関連を意識的に取扱ったイ・ルービンの見解<sup>(3)</sup>を検討し、労働の本質規定(抽象的人間的労働の性格規定)<sup>(4)</sup>と価値の内容の関連を明確にする一助としたい。

(1) M. Tugan-Baranovsky, *Theoretische Grundlagen des Marxismus*, Leipzig, 1905, S. 136.

(2) F. Petry, *Der soziale Gehalt der marxischen Werttheorie*, Jena, 1916, S. 29.

(3) И. И. Рубин, "Абстрактный труд и стоимости в

смысле Маркса", *Доб знаменем марксизма*, No. 1, 1927.

(河野重弘訳『経済学の根本問題』、共生閣、一九三二年所収。以下引用頁は同書より行う。)他に彼には主著「Очерки по теории стоимости Маркса」(1923)がある。

なおルービン理論の一般的特色づけは次論文参照。芦田文夫「『広義の経済学』否定論の系譜」『立命館経済学』、第一三卷第一・二合併号、「ソ連邦における一九二〇年代の価値論争によせて」『経済研究』、第一八巻第四号。

(4) 抽象的人間的労働を廻る論争は、一九二〇年代のソビエトに於て、社会主義社会建設遂行上での労働の評価・換算メカニズムの成立を廻って政策的次元でシベリアに展開された。コーン、イ・ダンコフスキーとルービンの論争が中心をなした。我国に於ては斯学の学的性格を反映して初発に於ては、河上肇対福田徳三の翻訳論争として起り、戦後の安部隆一の技術主義的労働規定に触発されて、一方では特殊歴史的な商品生産にのみ固有なものだとする歴史範疇説(宮川実、林直道、吉村達次、古川哲)と、他方では人間社会一般に妥当するものだとする超歴史範疇説(宇野弘蔵、日高晋、見田石介、山本二三丸、種瀬茂、高須賀義博)とへ二分化していった。その過程で労働の二重性そのものをも超歴史的とみる見解(岩瀬文夫、佐藤金三郎)をも発出させている。しかし、超歴史説に立つ時、それは究極的には人間労働を抽象的エネルギー支出に還元されざるをえず、歴史的規定性が欠落する。又労働の二重性の範

噂は、人間の平等性、労働の平等性が社会的に確立されたかの観を呈するブルジョア社会に於て概念的に認識される事実を想起する時、それもやはり歴史的形態規定をもったものとして摘出されざるをえないのではないか。

II

ルービンの労働概念と価値概念の検討の前に、先ずルービン理論の根底にある生産力と生産関係及び理論経済学の対象設定に関して簡単に一瞥しておこう。

彼の理論経済学の対象は、人間の生産諸関係であり、人間の生産的活動たる社会的生産過程つまり社会的物質的・生産諸力の一定の発展段階上で生じる経済的・社会的形態 $\parallel$ 交換関係(Austauschbeziehung)<sup>(1)</sup>である。この人間の生産諸関係は二タイプに分化する。一方では労働生産物の交換を遂行する生産者と購買者、売手と買手の関連であり、人間の社会的生産諸関係の「抽象的タイプ」をなし、マルクスの価値理論の対象となる。他方では労働力の売却を中心とする資本家と賃労働者の社会的関連であり、社会的生産諸関係の「具体的タイプ」をなし、剰余価値及び資本理論の対象となる。だがこの両タイプの人間は、形式的に独立した売手及び買手として交換過程上では「同質的地位」を受けとる(売買されるといふ純形式的類似性)が、生産過程上では「異質的地位」を所有している。この人間の社会的地位の同一性と相違性及び相互関連が理論的に解明するべき課題である。

以上がルービン理論の要約である。先ず第一に、彼は生産力を物質的・生産諸力とみ、直接的生産過程上での労働投下そのものを生産力としている。労働を媒介とする人間の自然への働きかけの中で、彼はそれを物質的質料交換過程として、労働と労働の成果 $\parallel$ 労働生産物との関連としてとらえている。だが上の過程が同時に人間と人間との交換過程であり、自然従って労働生産物を媒介とする人間同志の自己変革の過程ではないのか。なるほど(労働の)生産力は物的なものとして表出するのではあるが、物的体化の背景に人間交換を包み込んだ労働の社会性が現存している。この意味では生産力も又生産関係の一つの現われといえよう。ルービンは生産力 $\parallel$ 物質的なものとする事によって生産力の社会性 $\parallel$ 人間関係視点をドロップさせ、後に彼が改めて「労働の特殊社会的形態」に於て労働の社会性を取り上げねばならなくしている。

第二に、彼の生産関係論は交換関係論又は人間の社会的地位の変遷論である。彼は生産力の発展を自明の前提とし、生産力の極限状態下での人間の社会的関連が生産関係とするのだが、生産力の上昇そのものが如何なるメカニズムで行われるのか不問にされている。生産力がとる一形式として生産関係を把握すべき時に、彼は生産力の社会性を放棄して物質的なものとする結果、生産関係はその物的対象物の交換配分関係 $\parallel$ 物化された人間関係に解消される。しかもその人間が、先ず裸の人間の平等性として想定され、次に生産過程上での不平等性として、更に交換過程に於ける擬制的平等性として、上向進展するものとし

て把えられているのである。この平等性の回復過程が同時に労働生産物の交換関係の深化であり交換当事者の地位の変化過程とみなされるのである。ここに生産関係は売買関係となる。これでは生産力の一定状態で取り結ばれた人間関係が逆に生産力に反作用を及ぼしその生産関係に適應した生産力を形成するモメントが失われざるをえないであろう。物質的生産過程での労働の社会性の発現が生産関係であり、そこで実証されるのである。この意味で生産力と生産関係は同時性を有し、両者に主従の関係があるのではない。生産力の進展過程には既に人間の労働の社会性の拡大進展が秘されているのである。ルービン理論は上の両者の同時性を欠き、生産力と物的関係、生産関係と人間関係と交換関係と形式的並列関係に置いているのである。

第三に、上の一と二の特異な理論から、理論経済学は人間の生産関係と交換関係を究明するものだといわれる。物が「売買される」という形式をとるところに経済学が成立することになり、物の交換と売買を通じて人間の労働関係を実現させるか、人間の労働関係が直ちに物の交換・売買関係であるかに応じて、抽象と具体の二つの社会的生産諸関係のタイプに分れるとされる。彼の生産力論と生産関係論に於て欠落した労働の社会性と労働の物質性が、生産主体が取結ぶ物の交換過程に於て現実的に発現し実証されるが故に、彼はそこに分析視点を置いて、人の物化と物の人化の過程の統一上での人間の平等性の確証過程に理論経済学の対象を置くのである。だがこの彼の理論では、人間の労働関係が物の運動、物の売買形式をとらな、社会主

義・共産主義での経済学が否定され、経済学は狭義のそれと商品経済社会にのみ妥当されるにすぎなくならざるをえないであろう。人間の平等性が確立された社会での経済学の課題は、彼にはその課題そのものが成立しないのだから論証しようがないのである。けれども労働の社会性と物質性とはかかる社会でも依然存続する。そこでこの両者の実証過程又は実現機構が改めて解明しなければならぬのは言うまでもないだろう。ルービンが余りにも商品物神性論にとらわれていて、その物神性及び物化の除去のみに目をうばわれたと言わねばならない。物神化の下でもその除去後にも、なお社会的生産と社会的労働時間の合理的配分と節約というエノコミーの法則が貫徹している事実とその法則解明が理論的に要請されているのであって、ルービンはその点を見落してゐるのであった。

(1) I. I. Rubin, "Alfred Amonn und das Objekt der theoretischen Nationalökonomie", *Unter dem Banner des Marxismus*, Jg. 3, 1929, S. 141.

(2) Ibid., S. 141. I. I. Rubin "Stolzmann als Marxkritiker", *Marr-Engels Archiv*. Herausgegeben von D. Rjazanow. Bd. 1, S. 381.

(3) I. I. Rubin, "Alfred Amonn und..." S. 141.

(4) 宮本義男『資本論』の再生産構造』新評論社、一九六八年、三四頁。

III

ルービンの労働概念は、出発点に於て既に「社会的組織の徴表」が含まれていなければならない。最も単純な労働概念「具体的労働は人間対自然の第一交換で物質的技術的側面の労働として技術工芸学の対象とされ、第二交換たる人間同志の交換の中で、私的で異種な具体的労働が総和的に社会的労働の一環として位置づけられる。そしてこの労働の社会的組織の変化↓生産組織の変化↓社会組織の変化をもたすものとされる。彼は労働を、労働一般としてでなく、社会的形態を帯びたものとして問題にする。従って異なった労働種類の物質的結合⇨社会的分業一般よりも、この結合が現われるところの社会的形態(交換)⇨社会的分業の特殊社会的形態を重視することになる。社会的分業に基礎を置く社会(彼はこれを二分して、④交換によって媒介されない組織的な社会的分業体制⇨組織的共同体・社会主義と、⑤交換に基づく非組織的なそれ⇨商品経済としてい(る))での労働のあり方、二社会的分業体制間での「労働の組織に如何なる変化が起るか」が問題とされる。それは彼の「労働の社会的徴表」(二七五頁)⇨「労働の三徴表」(①社会的労働、②社会的平均労働、③分配労働)が如何なる形態と交互組合せによって貫徹しているかを問うことであつた。それは社会的組織をなす労働の社会的平均化・均等視過程の相違より生ずるのであつて、④では一社会的機関の意識的統制により直接的に均等化されるが、⑤では意識的的平均化機関の不存在のため、労働の平均化過程が間接的方法、つまり労働「生産物の全面的均等視」(三一八頁)⇨交換を通じることによって私的労働が社会

的労働として実証される。②を媒介して①と③が現実的に実証され、「平等労働の三概念」(①生理学的平等労働、②社会的平均労働、③労働の社会的均等視過程が生起するところのあらゆる社会的分業体制の特徵、社会主義及び商品経済に実存、④抽象的労働⇨商品経済に固有) (二七四頁) が⑤に於て確立するにいたるのであつた。

以上より、④⇨⑤上での労働組織の変化は、⑤に於ける労働の非意識的的平均化機関⇨生産物の全面的均等視過程⇨交換過程によって、労働の平等性と労働の社会的組織化が検証される点にある。ここにルービンが交換過程を異様に重視する根拠が存在する。けれども彼は生産を軽視せず、生産と交換との安易な差別立てに反対し、「交換の二つの概念」(二九九頁)を導入して両者の関連を明確化しようと試みていたのであつた。

彼の言う交換の二概念とは、(i)「直接的生産の様相に交代して現れるところの生産過程の特別な様相としての交換」⇨これは交換過程・流通過程の意だろう、と(ii)「再生産過程の社会的形態としての交換、生産過程そのものの形態としての交換」⇨これは生産過程に刻印を押す形態だと言われている点からして、生産過程に社会的規定性をもたすものであろう、とである。「労働も価値も交換がなければ存在しないし、交換の発展に応じてその労働が抽象的一般的労働の性格を得る。」この意の交換は(i)であろう。しかしながら、この交換から生じる形態規定は、交換過程以前に於て、社会的性質が可能的潜在的に存在していてそれが発現したものである。(i)は(ii)を前提せざるをえない

い。この点について彼は次のように言う。「人々が交換のため  
に生産する時以来、既に直接的生産の様相に於ては価値として  
の労働生産物の性質が留意されていること、及びそこで個々  
人の労働が全社会の労働機構に含まれていることは、備的、推測  
的であり、商品生産者の労働活動は生産の様相に於ては直接的  
には私的具体的労働であって、間接的・latentにのみ社会的  
労働である。従って、直接的生産過程に於ては抽象的労働も価  
値も未だ完全な意味でのそれらではなく、交換過程に於てのみ  
創造され・生成されて完全に実現される」(三〇二―六頁。傍  
点は引用者)。黒点が(i)、斜点が(ii)を示している。だが(i)も  
も白丸点部分の前提がある。つまり出発点に於て商品経済的形  
態規定を受けているのである。

このルービンの生産と交換の総合の試みは、労働生産物の全  
面的均等化 $\parallel$ 交換を通じて生産過程に社会的規定性を押しつけ  
るものによらず、生産の社会的形態性、生産過程の生産関係視  
点を強調したものである。交換・売買(形式)関係を生産・物  
質過程(内容)に挿入するという形態の内容化、形態が実体を  
とらえる視点であると言わざるをえない。それは生産力 $\parallel$ 物質  
的なものとして労働の社会性を放出した結果である。依然とし  
て交換の優位が説かれていると言わねばならない。

なお、ルービンが課題とした労働概念(価値を必然的に導出  
するところの)が抽象的一般的労働であるのは、価値も抽象的  
一般的労働も「労働生産物の必然的な社会的形態」であり、特  
殊的に歴史的社会的形態規定を受けている点で同一である理由

による。更にその労働が一般的平等性を一物に一般的等価物と  
して押印したのが貨幣であるから、抽象的一般的労働 $\downarrow$ 価値 $\downarrow$   
貨幣への移行は彼には自明であった。逆に言えば、かかる移行  
が可能なるように労働概念を豊富化し、抽象的一般的労働を規定  
したのであった。ここでは労働の物質性が欠落し、生産力論に  
於て欠落していた労働の社会性が、労働生産物の交換 $\downarrow$ この交  
換の社会的形態 $\downarrow$ 交換過程と社会的分業との物質的結合 $\downarrow$ 第二  
項までで実証されたとするのであった。労働の物質性と社会性  
生産力と生産関係は依然として分離されたままである。

(1) I. I. Rubin, "Stolzmann als Marxkritiker", *Marx-Engels Archiv*, Bd. 1, S. 379.

(2) 社会構成のかかる二分化思想の淵源は R. Hilferding  
にある。『一橋研究』第一六号参照。

(3) ルービン自身の②と③の区別は不明確だ。

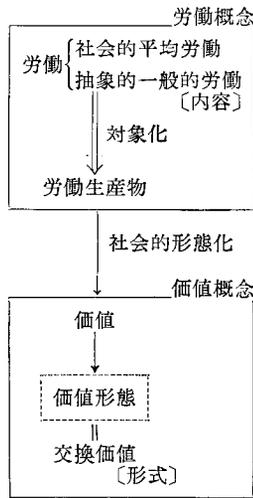
(4) マルクスが『経済学批判』では「抽象的一般的労働」  
を、『資本論』では「抽象的人間的労働」を専ら使用して  
いる根拠を廻ってかたて論争があった。安部隆一はこの用  
語法上の変化をとらえてマルクスのヒューマニズム思想の  
確立だと主張した。だがここでは両者を同一視しておく。  
ルービンは両者を前者又は単に「抽象的労働」とする。

(5) I. I. Rubin, "Alfred Amonn und..." S. 142.

IV

労働概念から価値概念への移行に際し、ルービンが課題とし

たのは「価値の概念へも社会的形態を持ちこむこと」(三〇七頁)であった。彼は商品の社会的形態⇨価値形態⇨交換可能性形態とするマルクスに依拠して、「生産物の社会的形態を二形態に分割」(三二四頁)する。即ち価値形態と交換価値である。前者が「未だ一定の物に具象化しない・いわば商品の抽象的性質をあらわすところの・生産物の社会的形態」、後者が「既に具象的な独立的な姿をとっている形態」だと規定された。そして次に要略するような価値概念の展開をとげるのであった。



けれども、この価値の実体⇨労働⇨価値の内容、価値の形態⇨交換価値⇨価値の形式という価値概念の中には二つの思想が混在している。先ず、彼が労働概念の規定に於て「社会的組織の徴表」を軸にしていた点である。価値に生成するような労働を、「可能的には労働一般と生産物の「交換可能性の形態」をとっている労働とに二分しながら、前者は社会的形態規定が欠如するため、労働の全面的均等視過程⇨交換過程に於ては、その労働が初発に於て保有している「交換可能性」の労働だけが交

換価値として発現してゆくと考えていることである。ここでは労働の社会性が労働の特殊社会的形態として現出している。第二に、上の労働発現過程がヘーゲルの「形式と内容」の論理学に基づいて規定されている点である。カント説に反してヘーゲル説(内容自身の内的発展を通じて形式が生じ出す)をルービンが支持しているのだから、そうであれば内容自身が形式をとる前に、自己の中に形式を含んでいることにならざるをえない。そこで彼はそれを先ず労働一般とし、次にその内容の発展につれて形式が確立されてくる過程で社会的形態性を帯びてくるから「交換可能性の労働」とするのである。ヘーゲル説に立ちながら内容と形式とを形式的に理解する結果、労働そのものの中にまで上の形式的区別をしなければならなくなる。これでは労働概念の自己展開として価値が出てくることになりかねないであろう。彼は労働概念の社会的規定性と価値概念の社会的規定性とを、商品経済社会であるという事実によって同一視している。ここには事実分析と認識過程及び論理的展開過程との混同があり、論理的展開の出発点に絶えず社会的形態を持ち込もうとする彼の根本思想が発露している。

最後に、彼は自己の「価値の内容規定」を開陳して終る。その際、彼はマルクスの価値の内容規定の中に、一見相反する二つの見方(α)社会的平均労働一般と(β)抽象的一般的労働)を見る。だがこの(α)と(β)との混在は、マルクスの二方法の相違を理解すれば矛盾ではないとルービンは言う。分析的方法によって、既存の形態(価値)⇨内容へ進めば、そこには社会的労働の支

出という事を見出すだけで価値の内容は(α)だとされる。これに反し、研究の出発点を既存の形態(価値)が出てこなければならぬ内容に選べば、内容(労働)↓形態(価値)への移行には、労働の概念に商品社会に於ける労働組織の社会的形態を含ませねばならず、価値の内容として(β)でなければならぬ。弁証法的方法に立つ限り(β)が価値の内容をなすと彼は考える。

ここに於て、彼の全議論の根底たる方法論の弱点が出た。彼はマルクスの二方法を単なる考察法上の対立に還元し、弁証法的方法↑上向法↓叙述法のみ正しい方法とみ、分析法↓下向法の意義は抹殺され、単に特殊歴史的な形態規定性を表象するに役立つ手段ぐらゐのものである。この分析法の輕視は、彼が余りにも商品生産者の諸関係、労働の均等化過程、労働生産物の全面的平均化過程↓交換過程という特殊な社会的形態規定側面に注意を集中しすぎた結果の現われであろう。下向法で歴史性が証明されているから、改めて上向法で歴史性を示さなくても、範疇展開が単純から複雑化されて行くことだけで歴史的發展ともなると考えたのであろうか。論理の複雑化に歴史が外部から付加されるだけで歴史の發展は与件として取扱われているのではないか。更にその歴史も具体的な歴史事象となり下がっていないだろうか。分析法の無視は、抽象の限界性を引きえなくすると同時に、真に総合的な方法の出発点をも確定しえなくしてしまうであろう。

ルーピンは、マルクス価値論・貨幣論の根本概念を五範疇 (a)商品生産者の諸関係、(b)抽象的労働、(c)価値、(d)交換価値、(e)貨幣)に区分し、五範疇の内的関連を、諸範疇の論理的な自己運動として(a)の下に展開するのであった。彼にとっては(a)はまさに出発点であり帰結点でもあった。価値の実体も形態も彼には、(a)の「不断の衝突」と「多様性」の諸相としてあらわれた。(a)↑実在的統一と(b)↓(e)↑論理的統一との形式的同一性こそ、ルーピンの労働及び価値概念の発生基盤があるのだ。従ってルーピン理論の内在的検討は、この実在的統一と論理的統一の差異性と同一性の究明にあるだろう。それは労働概念に於ける労働の社会性と物質性の関連、社会的分業一般とその社会的形態との関連、更には交換価値と価値と価値形態の区別と関連を如何につけるかの問題であろう。

(1) マルクス『資本論』初版、長谷部文雄訳、岩波文庫、七六頁参照。

(2) ルーピンはマルクスの方法を、分析的方法と弁証法的方法に二分している。後者は抽象↓具体への上向法であり、ルーピンによると、抽象的労働↓価値↓交換価値↑貨幣へと進む方法である。前者はその逆の方法である。彼は *oppor-tunities* な方法としての後者のみを正しい方法とみなしている。

(一九六九年二月一日)(一橋大学大学院博士課程)